ごみ埋め立て地からエコと平和

写真は朝日 28 日夕刊「まちの記憶」。東京都江東区「夢の島」の第五福竜丸展示館に激しい雨の中を訪ねた時を思い出す。懐かしいので記事を抜粋して紹介する。

ごみ埋め立て地からエコと平和

そもそも夢の島のルーツは、ごみではなかった。戦時中に「東京湾埋立 14 号地」として誕生した当初は、世界有数の規模の「東京市飛行場」になる計画だった。39 年には工事も始まったが、戦局悪化と資材不足で、わずか 2 年で中断、空港計画は白紙になってしまう。

空港の夢は破れたが、敗戦から 2 年後には海水浴場としての歩みをスタートさせた。東京湾の水がまだきれいだったころ、ビーチにはヤシの木が植えられ「東京のハワイ」ともてはやされ、たくさんの家族連れでにぎわったという。そのときについた名前が「夢の島」だった。しかし、夢はまた散る。台風被害や水質汚染に見舞われ、オープンからわずか 3 年で海水浴場が閉鎖されてしまったのだ。その後、高度経済成長に突入し、別の埋め立て地が満杯になったあおりを受け、ついに、夢の島にごみが持ち込まれるようになる。57 年のことである。

ごみ一つ落ちていない夢の島公園をすがすがしい気持ちで歩いていると、巨大なテントのような建物に出くわした。日本で最も有名なマグロ漁船ともいえる「第五福竜丸」の展示館だ。54 年、太平洋・ビキニ環礁で米国の水爆実験に遭い、乗組員 23 人が健康被害を受け、原水爆禁止運動の象徴にもなった。その船がいま、なぜ、夢洲にあるのか。

「第五福竜丸は夢の島に捨てられていたんです」と学芸員の蓮沼佑助さんが教えてくれた。陸から海から、島にはありとあらゆるごみが捨てられた。その中に、廃船となった第五福竜丸があった。67 年に係留、放置されているのが見つかり、翌年に朝日新聞「声」欄に「沈めてよいか、第五福竜丸」の投稿が掲載されると、全国的な保存活動が巻き起こった。76 年に展示館が完成し、無料展示が続く。「雨宿りでも、トイレ利用でもいい。たくさんの人に気軽に入ってもらい第五福竜丸の存在を知ってもらいたい。平和を考えるきっかけにしてほしい。だから無料です」と蓮沼さんは言う。

大阪には夢洲という人工島がある。そこで 2 年半後に万博が開催され、その隣には IR という名のカジノ誘致が進められている。「エコと平和」の夢の島とは大違いだ。

（2022 年 12 月 2 日）